

# 保管費用と運輸費用に關する一考察 (一)

— 使用價值論に關説する —

茂 木 六 郎

## 小 序

小稿は、流通費用に總括される諸費用のうち、「流通においてのみ行われる・かくしてその生産的性格が流通形態によつて隠蔽されているにすぎない・生産過程に起因する」(1)費用に關する一考察である。それが「使用價值論に關説する」という副題をもつのはつぎの理由による。

(一) 通説では、右の「流通においてのみ行われる……生産過程に起因する」費用と、いわば本来的ともいふべき生産過程の費用との差異は必ずしも明白ではない。保管費用や運輸費用のごとき「流通においてのみ行われる……生産過程に起因する」費用が、使用價值又は使用價值の一種<sup>2</sup> 有利用的效果を生み出し、かくてまた價值及び剰余價值をもつくり出すというにとどまり、それ以上に深く追究されていない。

かゝる通説に対し、きわめてするどい疑問が橋本勲氏によつて提起された<sup>3</sup>。即ち、通説は「両費用（保管及び運

輪の。以下本文中に両費用とあるは上に準ずる——引用者——を本来の生産費用と混同した理論ではなからうか<sup>(3)</sup>と。橋本氏は右について二つの論点から問題点を明示する。まず使用価値に即して、「両費用は利用効果を生み出すが、使用価値は生み出さない<sup>(4)</sup>」と断定されて、さらに「利用効果を直ちに『使用価値の一変種』と考え、両労働を本来の生産過程の労働と同一視することはできない<sup>(5)</sup>」と、利用効果を使用価値と同一視する通説の一つに対しても布石をされる。かくして、流通費用のうち保管・運輸の両費用についてこれまでさして問題とされなかった、本来的ともいうべき生産過程の費用との相異の「根源」を、使用価値の生産の有無に求められるのである。今、橋本氏に従ってこの問題を考察するとき、橋本氏の批判される通説が拠って立つ使用価値概念や利用効果についての反省まで立入ることは行論の成り行き上是非もなき仕儀なのである。これが主たる理由である。

(二) 筆者は右に「根源」と用いた。なぜか？ 橋本氏においては両費用が使用価値を生産するか否かに氏自身の提起した問題の論理を尽してはいないからである。両費用と、いわば本来的ともいうべき生産過程の費用との相異点は当然価値に即しても考察される。即ち、「第二に、価値については、両費用が『価値を創造し』『価値増殖をする』<sup>(6)</sup>」というのはゆきすぎである。この問題については、社会的観点と個別的観点とを明白に区別し、社会的観点からは、両費用とも生産物の控除をなし、剰余価値を減少する<sup>(7)</sup>と橋本氏はマルクスに依拠しつついわれる。両費用は個別的観点からは、商品の価値に「価値を追加し、価格を高めはする<sup>(8)</sup>」のが、社会的観点に立てば両費用は純粋な流通費用とともにすべて社会的富の空費である。したがって、「生産物からの控除になり、剰余価値からの控除にもなる<sup>(9)</sup>」のであって、これを筆者の言葉で補足するなら、いわば本来的ともいうべき生産過程の費用が、個別的観点からであろうと、社会的観点からであろうと価値を創造し価値増殖を行うのとは、この点において異するというのが橋本氏の第二の論点である。

今、個別的観点における価値の追加についての詳論は一応別とすれば、むしろ問題はこの場合には社会的観点における「剰余価値を減少する」という点にあることは疑う余地はないようである。ではこの社会的観点を橋本氏がどう見ておられるかといえ、社会的再生産の見地であると考えておられるのである<sup>(9)</sup>。かくて社会的再生産における素材的な填補は社会的生産物のうちからなされねばならないという点においてはじめて、(一)にのべたような橋本氏の定言(即ち両費用は使用価値を生産しないという)が生きてくるのである。かくてまた価値的にも本来的生産部門で創造された剰余価値を減少させるということができるのである。このように見てくれば、価値の点における橋本氏の考察もまた使用価値に即しての考察を基礎としなければ成り立たないとさえ考えられるのである。これが「流通においてのみ行われる……生産過程に起因する」費用を考察するに際して、使用価値及び有効的効果を論ずる諸説に關説せざるを得ない徒たる理由である。

(註) (1) 資本論長谷部文雄訳日本評論社版第五分冊二五九頁 (以下特に訳文又は訳語の上で問題とするのでなければ、資本論五―二五九の如く略す)

(2) 橋本勲「保管費用と運送費用——安部教授および通説に対する一批判」(香川大学経済論叢第二十九卷四号所収)

(3) 橋本 右同 二頁

(4) 右同 二頁

(5) 右同 一二頁 但しここに「両労働」というのは、費用はそれが充用される形態からは、生きた労働とすでに對象化された労働とから成るといふ意味である。

(6) 右同 二頁

(7) 右同 一四頁

保管費用と運輸費用に關する一考察 (一)

(8) 右同 二頁

(9) 右同 一五頁

(一)

資本論第二部第一篇第六章の「流通費用」は、第一節「純粹な流通費用」、第二節「保管費用」、第三節「運輸費用」から成るが、第二節と第三節は、両者の細部での相異点は別として第一節に対比するときには、「流通においてのみ行われる……生産過程に起因する」費用を内包する費用として差し当り一括しうる。

「純粹な流通費用」は、その内部において 一、直接に商品の売買に起因する費用 二、簿記に関する費用三、貨幣を生産するための費用の三つに分岐する。この「純粹な流通費用」を、「流通においてのみ行われる……生産過程に起因する」費用と対立的に區別しうるのは、資本論のつぎの個所にもずいている。

「価値の単なる形態変換——觀念的に考察された流通——に起因する流通費は諸商品の価値には入りこまない。かかる流通費に支出される資本部分は、資本家が考察されるかぎりでは、生産的に支出される資本からの単なる控除をなす。いま吾々が考察しようとする流通費は、その本性を異にする。これらの流通費は生産諸過程——流通においてのみ行われる・かくして、その生産的性格が流通形態によって隠蔽されているにすぎない・生産諸過程——に起因しうる。それらは他方では、社会的に考察すれば単なる費用であって、労働——生きた労働であれ対象化された労働であれ——の不生産的支出でありうるが、しかしそれ故にこそ個別的資本家にとっては価値形成的に作用しえ、彼の商品の販売価格への追加分をなしうる」<sup>(1)</sup>ここに見るとおり「純粹の流通費用」とは価値の単なる形態変換に起因す「費用をいうのである。右に依拠するならば、第二節「保管費用」及び第三節「運輸費用」のうちにおいても、それ

るが「価値の単なる形態変換に起因する」場合には、「流通においてのみ行われる生産諸過程に起因する」費用と称することはできない。<sup>(3)</sup>むしろこの場合は、明らかに「純粹な流通費用」の性格をもっているといわなければならない。かくて、小稿で保管費用乃至は運輸費用というときには、右の「純粹な流通費用」的性格の両費用を除いていうのである。

右の資本論よりの引用文にみるとく、両費用は「個別的資本家にとっては、価値形成的に作用する」のであるがこの「価値形成的に作用する」なる語が、本来の生産過程の価値形成や価値増殖と全く異なる意味であるかどうか、ここでまず問題となるであろう。今ここで語学上の問題にかかわることに筆者は興味をもたないので、マルクス自身保管及び運輸の両費用についてそれぞれ言うているかについて見てゆきたい。先づ保管費用については、

「……商品資本としての・従って商品在荷としての・形態での資本の定在は、生産部面に属しないが故に流通費に算入される諸費用を生ぜしめる。これらの流通費が第一節であげられた流通費〔純粹な流通費用〕——筆者註」と區別される点は、前者は特定の範囲内で商品の価値に入り込み、かくして商品を高価ならしめるということである。<sup>(4)</sup>また運輸費用については、

「……運輸業において投下された生産資本は、運輸された諸生産物に価値を追加する——一部分は運輸機関からの価値委譲により、一部分は運輸労働による価値追加によって。この後にあげた価値追加は、すべての資本制生産において然るのと同様に、労賃の填補と剰余価値とに分裂する。」<sup>(5)</sup>との表現を与えている。保管費用について右にいわれている「高価ならしめる」という語句が、よしんば価格を高くさせるといっているとしても、資本論のこの部分においては価格と価値とは一致していると前提されているのであるから、「価値に入り込み」という前の語句と併せ考えるならば当然価値の形成と増殖を意味していると考えなければならない。この点は運輸費用となれば、価値の追加

の内容が「運輸機関からの価値委譲」と「運輸労働による価値追加」と明示されている上に、つづく価値追加の説明において、「労賃の填補と剰余価値に分裂」と詳論されているからには、本来的ともいふべき生産過程の費用と両費用との相異点を、とくにとりたてていなければならないとは筆者には考えられない。だが橋本氏においては、何故マルクスが、両費用は価値を形成するとか、価値増殖を行うとかという表現をせずに「価値に入り込む」とか、「価値を追加する」などという紛わしい表現をしているのかという設問が残るであろう。一見表現の問題にすぎないようであるが、両費用が「社会的観点から見れば生産物からの控除になり、剰余価値からの控除になるという事情」<sup>(5)</sup>をとくに重視する橋本氏にとってはこれは単なる表現の問題ではないのである。右の「事情」に更に立ち入ってみるならば、「生産物よりの控除」とは素材的（＝使用価値的）観点からかくいっているのであり、「剰余価値からの控除」とは文字通り価値的視点からかくいっているのである。ところが、この価値的観点からいふならば、一方、個別資本的には価値が追加されるといふ、他方、社会的再生産の見地からは価値＝剰余価値からの控除であるというのである。果してこのような事が起りうるかという疑問さえ湧こうが、この解答は価値視点からは与えられない。筆者の理解に誤りがなければ、この解答は、価値の担い手としての使用価値の観点からはじめて与えられると橋本氏は考えられているように見える。なぜなら、社会的再生産の見地からいって剰余価値からの控除であるといふときには、その価値の実体の担い手たる使用価値もまた控除——再生産の見地からは填補ということになるが——されざるを得ないであろうから。またこの意味でなら「社会的富の空費」ということも充分理由あることなのであるから。

ところが橋本氏にあつては、右の理由以前に両費用が空費であるという有力な理由が存在していたのである。即ち両費用は、有目的効果は生み出すが使用価値を生産はしないという定言がこれである。安部隆一氏が、有目的効果（安部氏の訳語では利用効果となっている）を使用価値の一種と見做し、一方で両費用を有目的効果（＝使用価値の

一種)を生み出すという点で生産的としながら、他方でその有用的効果を消費する際而費用が何ら使用価値をつくり出さないという理由でこれを空費とされる見解を批判しつつ、橋本氏はつぎのようにいわれる。

「消費(有用的効果の——筆者註)が何らの使用価値をつくり出さないから空費なのではない。使用価値を生産しないから空費なのである。消費が使用価値をつくり出さないことを空費の論拠とするならば、生産物に対象化された使用価値も、個人的な消費にあてられるばあいはすべて空費になってしまうであらう」と。

さて、ここまで橋本氏の論理に従って来た筆者は、ここにおいて、「空費」の理由を而費用が使用価値をつくり出さないとされる点に当惑を感じざるを得ない。なぜか？ それは、そのものが生産されるに当っては使用価値もまた価値も生産されながらなお社会的には空費に属する場合のあるためである。

本章の冒頭で貨幣生産のための費用が「純粹な流通費用」に属することを示した。貨幣商品としての金又は銀が個人的消費にも、また生産的消費にも入り込まないことは論ずるまでもない。貨幣材料としての金銀が現実には貨幣となつてゐる場合には、社会的に生産された生産物の一部分が不生産的形態に固定される。そればかりではない。その貨幣の磨損する部分は、他の事情にして変化しない限り、社会的生産に要する資材と労力の充用によつて生産された金銀によつて填補されなければならない。マルクスは、資本論第二部第二篇第十七章「剰余価値の流通」を論じている個所である。

「流通用具としての金銀の年々の生産に支出される労働力と社会的生産手段との全額は、資本制生産様式の——総じて商品生産に立脚する生産様式の——重荷たる空費をなす。それは、それ相当額の可能的追加的な生産手段および消費手段、すなわち現実的富を、社会的利用から引上げる。」のと。

右にいう「重荷たる空費」は、決して貨幣生産が使用価値を生み出さないということによつてそうなのではなく、

貨幣商品の存在、従つてまたその生産に要する費用の必要が、「価値の単なる形態変換」に起因するからなのであつて、だからこそ「純粹の流通費用」なのであり、またその限りでの「重荷たる空費」なのではないか。

貨幣商品たる金銀が他の生産物と同様に資本家的に一定の価値を有するものとして、利潤を得て生産されるということは、個別的観点即ち個別資本的見地からは、価値を形成し従つて価値増殖を行うことに外ならない。ただその循環の方式には生産された商品が流通界に直接投入されるという限り、運輸業における資本循環の範式に表面上同一に見えるという特徴があるにせよ。この形式上の特徴から生じうる誤解をさけるためにその物質的生産としての一般性をマルクス自身によつて確認するならば、

「吾々は、貴金屬生産に投下された資本の循環または回轉を、まず第一に  $G-W \cdots P \cdots G$ 、なる形態のもとで考察しよう。 $G-W$ において、 $W$ が、労働力と生産手段とから成り立つばかりでなく固定資本—— $P$ で消費されるのはその価値の一部分にすぎぬが——からも成り立つかぎりは、 $G——生産物——$ は明かに、労賃に支出された可変資本・プラス生産手段に支出された流動的不変資本・プラス磨損せる固定資本の価値・プラス剰余価値・に等しい貨幣額である。」<sup>(8)</sup> 「……生産物はその自然的形態のまゝですでに貨幣であり、かくしてそれは、交換により流通過程をへて初めて貨幣に転形されるを要しない。」<sup>(9)</sup> ここにいう生産物が「自然的形態」をもち、その価値構成において、 $C+V+M$ なる内容をもっていることは疑う余地はない。

だが右についてもさらに一つの疑いが提起されうる。それは、右にいうのは貨幣の費用ではなくして貨幣素材の生産に関する費用なのではないかという問題がそれである。成る程貨幣と貨幣素材とは異質といふべきである。だが、そもそも貨幣素材を全く離れて貨幣について考察することがそれ自体として重大な意味をもたないばかりでなく、貨幣の費用という商品・資本制経済での社会的費用を、貨幣素材の生産・再生産を離れて考察することは全く問題にならぬ



のではなからうか。小稿の如く資本論の「流通費用」について論ずるときには、同じ資本論中の「社会的総資本の再生産と流通」において何故に「貨幣素材の再生産」が考察の対象になっているかを考慮しただけでさえ、貨幣の費用と貨幣素材の生産における費用を切りはなすことの無意義であることは明白である。ただこの場合でも貨幣素材の使用価値と貨幣の使用価値との問題提起は残ろう。この点に關しての詳論は後章においてのべるとして、さし当っては貨幣そのものについて、使用価値をみとめるか否かに對する解答をつぎに求めておくことで止めておくことにする。即ち

「貨幣商品の使用価値は二重化する。たとえば、金は齲菌の充填・奢侈品の原料等々に役立つというが如き、商品としてのその特殊的な使用価値の他に、貨幣商品は、その独自の・社会的な諸機能から生ずるところの一の形式的な使用価値を受けとる。」<sup>(10)</sup>

以上附随的問題に立ち入りすぎた様ではあるが、ここで橋本氏の見解と別れた個所まで立ち戻らう。橋本氏によれば、両費用は、社会的観点からは空費であり、その空費の理由は両費用が使用価値を生産しない（有目的効果は生産するが）ということ切りはなしがたく結びついていたのであった。そしてしかも、この点に本来的ともいうべき生産過程との相異点をみとめられたのであった。だが附随的に論じたかの如き右の貨幣生産の費用は、使用価値も価値も生産することは明白であるにも拘らず、社会的観点からは「重荷たる空費」なのである。とすればこの社会的空費の理由を橋本氏の如く使用価値を生産しないという点に求めることは無理なのではないだろうかという疑問が筆者から離れないのである。だがと筆者はさらに自答してみる。橋本氏は、両費用は使用価値は生産しないが有目的効果は生産するといわれているのではないかと。ではこの有目的効果と使用価値との相異のうちに、生産的費用としての両費用が社会的には空費であるといいうる秘密を保持しているのであろうか。

註 (1) 資本論 五——二五九頁

(2) 「保管費用」中純粹な流通費用に包含される費用とは「在荷の異常形態」として投機を目的としたり、買手がなくために過剰在庫となったりする場合には「諸費用は依然として同じであるが、しかしそれらはいまや純粹に形態から——すなわち商品を貨幣に転形することの必要から、およびこの姿態交換の困難から——生ずる」(資本論五一二八頁) 諸費用をさす。また運輸費用に関しては、当該章節にはその指示はないが、投機を目的とする商品の輸送或は個人的消費を目的とする旅客輸送等の費用は、右と同じく純粹に形態交換に起因する費用であると考えて差支えないであろう。

- (3) 資本論 五——二六三頁
- (4) 資本論 五——二八四頁
- (5) 橋本勲 前出 一五頁
- (6) 橋本勲 前出 一〇頁
- (7) 資本論 六——三六五頁
- (8) 資本論 六——三八頁
- (9) 資本論 六——三二九頁
- (10) 資本論 一——二九〇頁

(二)

貨幣生産の費用に見るごとく、使用価値(従って価値)を生産するにも拘らず社会的には空費である場合があるのであるから、使用価値を生産しないからといって、両費用がそれによって社会的に空費であると断定できにくいのではないかという筆者の設問は前章の末尾でのべた通りである。一步をすゝめて、そもそもその担い手たる使用価値なく

していかにして価値を追加しうるのかという設問すら可能なものではなからうか。

「……使用価値は総じて交換価値の担い手ではあるが、しかし交換価値の原因ではない。同じ使用価値は、もしそれが労働なしに調達されうるならば、何等の交換価値ももたないであろうが、しかし相変らず、使用価値としての自然的有用性を保持するであろう。だが他面、ある物は、使用価値〔たること〕なしには、つまり労働のかかる自然的担い手〔たること〕なしには、何らの交換価値もない。」<sup>(1)</sup>とするならば、使用価値の生産されてないのに価値が追加されるというのは果して可能なのであろうかという疑問も全く根拠のないことではない。

だが、橋本氏にあっては、使用価値に代る有用的効果が生産されるため両費用は、価値を追加しうるとされるのである。しかし有用的効果の場合には、同時に何故価値が創造されないで、追加されるのかという点の積極的な証明に欠けているため、典拠と考えられるものに基いて筆者において橋本氏の論理を推測するの外はない。まず典拠として、あげることのできるのは、運輸費用に関連して、交通業についてのつぎの個所である。

「……一般的範式においてはPの生産物は、生産資本の諸要素とは異なる物質的な物——すなわち生産過程から分離された実存・生産諸要素の使用形態とは異なる使用形態をもつ一対象——と見做される。……ところが、その生産過程の生産物が新たな対象的生産物でなく商品でないような、自立的な産業部門がある。そのうちで経済的に重要なのは交通業——のみである。」<sup>(2)</sup> まず生産物が対象的生産物でないという点より、交通業の生産は使用価値を生産しないと判断されると考えられる。さらにひきつづき、つぎの

「ところが運輸業が販売するものは場所変更そのものである。生み出される有用的効果は、運輸過程・すなわち運輸業の生産過程・と不可分離に結合されている。……その有用的効果は生産過程の中でのみ消費されうるものである。それは、この過程とは異なる使用物——……——としては実存しない。しかし、この有用的効果の交換価値は、あらゆ

る他の商品の交換価値と同じように、その有用的効果（の生産）において消費された生産諸要素（労働力および諸生産手段）の価値に加えるに、運輸業において成就させられた労働者たちの剰余労働が創造した剰余価値を以てしたのもによって規定されている。その消費に關しても……それが個人的に消費されるならばその価値は消費と同時に消滅する。もしそれが生産的に消費されるならば、かくしてその有用的効果そのものが輸送中にある商品の一生産段階だとすれば、その有用的効果の価値は追加価値としてその商品そのものの上に委譲される。」<sup>(6)</sup> という文中から、その販売されるものが場所変更という有用的効果であるという点がとり出されてさきの判断と結合されるなら、生産されるものは使用価値ではなくして、有用的効果であるということになるであらう。これだけではもちろん典故は充分ではない。前段の使用価値が生産されないと断定されるには、「保管費用」を論じている同じ資本論の「かくして商品の使用価値を追加することなしに商品を高価ならしめる諸費用」<sup>(4)</sup> 又は運輸費についての、「生産物の分量は、その運輸によっては増加しない」<sup>(5)</sup> 等によって補足されていることは考えられるところである。

さらにこれを価値の点より裏づけるものがある。即ち有用的効果の消費に關連して、商品の輸送が生産的であるならば「その有効的効果の価値は追加価値としてその商品そのものの上に委譲される」という個所が有力な典故となりうるであらう。ここまででは推論をも加えて橋本氏の論理に従ってきたのであるが、ここでまた一つの疑問を消し去ることができなくなるのである。

これまで多くの引用をマルクスから行ってきたが、どこに両費用が使用価値を生産しないという表現があったであらうかという疑問がこれである。生産物が対象的生産物でない運輸業や保管業においても、対象的生産物でないということから直ちに生産されるものが使用価値でないといつていいかどうか、問題はまさしくここにあったのである。また、保管費用について、保管費用の支出の対象たる在荷が、「価値の姿態変換」を起因とするのではない場合に「使

用価値はの場合には高められも増加されもせず、むしろ減少する。だが、その減少が制限されるのであり、かくして使用価値が維持されるのである。」<sup>(6)</sup> といわれるときですら、「高められも」「増加も」しないといわれているがどこにも「生産されない」との表現はない。たえず減少しつゝある使用価値を同量に維持するためには、その減少してゆく量に等しい使用価値量を生産して填補するならそれは可能となるであらうし、その填補の量によってはそれは「高められも、増加も」しないという表現がそのときとられても不思議はない。この種の説明は一見詭弁の如く見えるかも知れぬ。だが、後に使用価値をどうとらえるかを明らかにするにつれて必ずしも右の説明が故なきものでないことを理解されると確信するが、さし当っては、つぎのマルクスの言葉を見られたい。

「W—G」なる商品資本の流通にとっては、諸商品そのものの実存形態・諸使用価値としての諸商品の定在によって一定の諸制限が設けられている。だから、もしそれらが特定の期間内にその使命どおりに生産的消費または個人的消費に入りこまないならば、換言すれば、もしそれらが一定の時間内に販売されないならば、それらは死滅して、その使用価値とともに、交換価値の担い手だという属性をも失うのである。諸商品のうちに含まれている資本価値、またはこれから生じた剰余価値は失われてしまう。諸使用価値は、それらが絶えず更新されまた再生産される——同じ種類または異なる種類の新たな諸使用価値によって填補される——かぎりでのみ、ひきつづき永続的なしかも自らを増殖する資本価値の担い手である。」<sup>(7)</sup> この内容を筆者の意図する理解で補足すれば、ここでの使用価値なる語を直ちに特定の商品体と理解しない方がよいということである。その理由は冒頭に近く「諸使用価値としての諸商品の定在」なる語があることに留意すれば自ら判明すると思われる。（詳しくは後述）

この筆者の見解を以て橋本氏の見解に対処するとき、橋本氏の有目的効果を使用価値に言いかえてみる必要があるように考えられる。即ち筆者は、通説を一步すすめて有目的効果を使用価値の一種とは見ずに使用価値であると提案

したいのである。即ち両費用は、使用価値を生産し、従ってまた価値を生産すると。ではとの反問が出よう。本来的ともいへべき生産過程と両費用とは同一になるのではないかと。だが俟たれよ。筆者は、両費用が空費であることをも併せ主張するものである。ただその空費であることの理由において橋本氏とも異なるし、また通説とも異なるが両費用が空費であるという点においては格別の異論を立てようというものではない。

空費であるというとき、通説を要約すればつぎのようになる。「運送費用は使用価値を消費しながら、しかも何らの使用価値をつくり出さない」<sup>(8)</sup>と。この通説に関しては橋本氏の安部氏に対する批判によってつきるであろう。

(一)の註の(6)「両費用の空費について筆者はつぎのように考えるのである。即ち両費用は、流通界における生産費用であるから空費なのであると。何故なら通説は、両費用がなぜ使用価値をつくり出さないのかということには何ら答を用意していないが、もし両費用が流通界における費用であるという事実を確認するならば、この回答のきつかけを与えたことになるのではなからうか。この点に空費とは社会的再生産の見地であると提起された橋本氏の問題の鋭さがあつたと考えなければならぬ。個別資本の見地からの使用価値の生産の有無ではなくして、社会的総資本の再生産と流通の見地に立つのでなければ、社会的富の空費という言葉さえ無意義なのであつたのである。だから、また問題は緒は保管費用における空費の二つの種別のうちにすで見られるのではなからうか。簿記や売買取引が使用価値には作用しない空費であると指摘したのちになお在荷形成一般が商品在荷という形態をとることによって生ずる保管費用についてマルクスはいう。「在荷形成（これはここでは本意でない）に伴うこれらの空費は、単に形態転化の停滞から、および形態転化の必要から生ずるにすぎぬとはいへ、しかもそれらの空費は、その対象そのものが価値の形態転化ではなくて価値の維持である——価値は生産物・使用価値としての商品のうちに実存し、従って生産物・使用価値そのものの維持によってのみ維持されるのだということによって第一節の諸空費から区別される」<sup>(9)</sup>と。純粋な

る費用に包含せられる保管費用と異り、その起因が生産の社会的形態にかかわらない、換言すればいかなる生産形態においても不可避免的な保管・運輸は元来生産過程そのものであるが、商品生産社会において流通界に延長されざるを得ないという事実こそ、本来の生産費用と両費用との相異点の根源であるといえることができる。(ひきつづき使用価値と有用的効果と両費用について考察をすゝめる)

- 註 (1) 資本論 一一一―一六六頁
- (2) 同 五一〇―四一五頁
- (3) 同 五一〇―六頁
- (4) 同 五一二六〇頁
- (5) 同 五一二八四頁
- (6) 同 五一二六四―五頁
- (7) 同 五一二四二―三頁
- (8) 安部隆一 「流通費用の経済学的研究」 一〇八一―一二頁  
宇野弘藏 「資本論入門」 八六頁
- (9) 資本論 五一二六四頁

(未 完)